

モリアの宗教發生論

菅 圓 吉

G. F. Moore の最近の著、The Birth and Growth of Religion によつて、私は彼の宗教發生論を辿つて見たい。

モリアは、宗教の一般性 (Universality of Religion) を信じて居る。彼に従へば、人間は何等かの形にて宗教を有するとは、現在、人類學者間に有力な説であるばかりでなく、又、バビロニア、エジプト等の太古の歴史の事實、及び現存する未開人に就ての種々なる研究は、等しく此の事を確めるのである。而して此の宗教の一般性と云ふ事よりして、我々は、宗教が人間に共通な動機より

發生するのである事を推量し、且又、原始の宗教觀念が何處に於ても殆ど常に一樣である事よりして、我々は宗教が人間の環境と經驗とに對する自然な反應として生起し來る事を知るのである。然し如何にして人類の最初に於て宗教の根本的起源が生起したか、而して、それは如何なる原因に基くかは全く知るに由ない、否、それは永久に知るに由ないであらう事は、倫理や論理の世界に於けると全然、同じである。トルレルチが云ふ様に、すべて、かゝる起原を見出さうとする試は、現在、我々が持つ經驗の比論 (Analogie) によるのである。それ故に、宗教の起原の問題は、歴史的探究によ

つては不可能であつて、それは心理學的研究にま
たねばならぬ。

然らば人間は如何にして宗教を創造するに到つ
たか。偕、今我々があらゆる人間の行爲に共通、
不變の動機なるものを求むれば、我々は之を自己
保存の衝動の中に見出すのである。人間は此の衝
動を總ての他の動物と共有する。動物に於ては、
此の衝動は各動物に特有な多くの本能となつて現
はれる。進化の程度の低い動物に於ては、此の衝
動は防禦的著色とか擬態等の形式をとり、進化の
程度が進むに従つて、それは次第に意識的となり
理智の作用によつて伴はれるに到る。兎に角、常
に此の自己保存の衝動は、個體及び種族の生存の
制約なのである。人間に於ける自己保存の原始的
表現は、己が生命と安寧とをおびやかす敵より逃
れ、或は又、その敵と戦ふ事、及び、飢餓や性欲
の如き自然的欲求の満足に向ふ。然し自己の安寧

と云ふ事は、間もなく人工的欲求をも含むに到り
かゝる人工的欲求を満足せしめる事も亦、此の自
己保存の衝動のつかさどる處となる。然し、個人
は、全然、己自身の利益のみを計るのではない。
個人は、全然、單獨に生存しないし又、し得な
い。個體の保存と云ふ事は、屬々、其の個體の屬
する種々の保存の中に包括されるのである。此の
事は群生動物を見れば明かである。例へば、野生
の馬や、其の他の群生動物と呼ぶる、蓄類に於て
は、彼等の敵によつて襲はるゝ時に、その群の中
成熟した雄は、雌と子供とをとりまき、弱者を防
がむ爲めには、己が生命を危険と死とに曝らすの
である。是は、その群獸の生存、換言すれば、そ
の群をつくる個體の生存、引いては、その種の保
存の條件である。是と同じ事は又原始人に就ても
見られる。一部落の強者が、時には己が生命をも
犠牲として、弱者を防禦するのは、その強者が、

若し危険と戦はずして逃走すれば其の結果如何と熟考反省の上で行爲するのでなく、動物より繼承した本能の表現である。此の衝動は始めは自發的行爲として現はれるが、社會が進化すると共に、社會的動機によつて助けられる。「None but the brave deserve the fair」とは多くの部落に於て、妻をめぐらざる際の重大なる條件、又は規約である。此の集團的興味は、危険に對する反應作用としてのみ見らるゝのでなく、それは平時に於ては、一部落の有力者が無力者の爲めに、或は其部落全體の爲めに食糧を獲得し又割譲すると云ふ形をとるの如く、蜂や其の他の昆虫に於けると同じである。斯の如く、人間の自己保存の衝動は、その個人的、社會的の兩展相に於て、等しく古く又、本能的であり、命令的である。然し、人間の知識の進歩と共に、自己保存の要求は、更に其の意味を深め來る。即ち人間は己が生命より以上に尊しと判斷す

るあるものが存在し、かゝるものこそ人生をして生きるに價値あらしめる、それと比較しては、總ての此世の福利、否、己が生命迄も無價値と考へるに到る。此の最高價値とは、自己が自己に對する價値、即ち最高の自我の價値である。人間は此の價値が處與のものでない事、即ち單に維持し保存して行けばよい生具の能力ではなくして、總ての最高價値は、自然に於ては唯だ可能として僭在せるものを顯在せしめる事によつて獲得せられるのであるを知る。かくて、消極的な自己保存に對して、その積極的方面、即ち人間の性質の中に可能として備はれるものを限なく開發せしめ又、完成せしめると云ふ事が附加されねばならぬ。此の消極、積極の兩面の意味を明かにすれば、我々は、自己保存の衝動が宗教に於ける普遍的動機であると云つてよい。此の事は又、我々の宗教的經驗と符合するのである。「宗教とは何ぞや」との、

ある宗教心理學者の質問に對する總ての答へは次ぎの言葉で總括せられた。"Life, more life, a fuller, richer, more satisfying life."

然しモアに從へば、此の自己保存の衝動それ自身は未だ宗教ではない。進化の度の低い階級では、それは全然、生物學的である。又、人間に於ても、若し彼が何の危険に曝らされる事なく、常に安樂に己が欲求を充たし得る如き世界に住むとすれば、彼は決して宗教を求めないであらう。

然し原始人の住む實際の世界は其の反對であつた。原始人は常に不安であり又、自足し得なかつた。彼の身邊は、彼の安寧と生存とをおびやかす多くの危険によつて取捲かれて居た。加之、焦眉の欲求を充たさうとの彼の努力は屢々失敗した。

換言すれば、彼は己の行爲が不思議にも齟齬するを經驗した。かくて彼は己自身の方のみにては足らざるを知る。モアは此の原始人の經驗と、其

の經驗を彼が如何に解釋するかを次ぎの如くに想像する。今、我々が偶然と稱する事件が起つたとする。例へば原始人が森林を歩ける時、突然、木の枝が彼を目懸けたかの如く落ち來つたとする。

此時、彼は此の木、又は木の枝は意志を以つて彼に何事かを仕掛けようと工むだと考へる。或は又病氣の現象に於て、彼は不可見、不可解な原因が健康な人間を不意に苦しめ、時としては死に至らしめるのを見る。かくて、彼は己が同輩、友人、仇敵、動物、否、彼の五官にて經驗し得る事象の他に、彼が豫知し又、左右し得ない、彼には了解の出來ないあるものが彼の身邊に存在するを知り始める。かゝるあるものは、それが活動し、人間に働きかけ來る時のみ其の存在が知らるのである。従つて、我々は此のあるものを力 (Power) と呼んでよからう。然し我々は此の力なる語を出來うる限り朦朧たらしめ、其の力の性質如何の問題

には立入らないのである。

偕、人間に何事かを爲すのは、まさしく此のものである。而して原始人の注意は主として此の力の爲す危害に先づ向けられる事は、我々文明人に於けると同じく自然な事である。何者、若し何事も思ふまゝに運ぶならば原始人は此のあるものに就て考へないであらうし又、考へる必要もない。然しながら、かゝる方の存在を原始人が知るのには彼が結果よりして原因を推論すると云ふ仕方によるのではない。因果の範疇は原始人の心理學中には存しない。原始人の心理作用に於いては原因と結果とは尙ほ未だ時間的にも論理的にも同時(simultaneous)である、従つて彼は既に生起した事柄の原因に就ての探究を試みない。是と等しく又、原始人の心理作用には我々の所謂、偶然なるものが缺けて居る。總て物は偶然起ると云ふ事はあり得ない、單に起るのである。否、更に進むでそれは

誰かによつて、爲されるのである。原始人の方の觀念の中には此の直覺的要素が含まれて居る。何事かを爲すものは、總て人間や動物に於て見る如くに、それが意向するからである。彼は直覺するのである。心理學者は是を人格化的統覺 (personifying apperception) と呼ぶのである。その意味は之を簡單に云へば、經驗の主體としての人間が己自身の心的作用を経験の容體に投射する事である。此の意味に於て又、此の限りに於て、人間は始めより必然的に己が經驗する力が人格を持つと考へると云つてよい。然し我々は原始人の人格なる觀念を我々自身の持つそれと混同してはならぬ。兎に角、原始人の世界に於ては、何事かを爲すものは、總て爲さむと欲すと殆ど無意識的に考へられるのである。

然し近來、注意の的となりつゝある事實は、地球上の多くの、而も遠く相隔つた地方に於て、あ

る祕密的力なる觀念が存し、原始人の成功、權力及び卓越等は盡く此の超自然的、超人間的祕密的力に歸因すると云ふ事である。人類學者等は、一般に此の力をマナ (mana) と呼ぶ。Codringtonの著書メラネシアンズ (Melanesians) は始めてかゝる現象を此の名で記述した。是と同じ觀念はメラネシア以外に於て、特にアメリカ土人の間に於て又マダガスカルに於ても發見された。學者達のとく此のマナは非人格的であつて、無生物の中にも亦有生物の中にも宿り得、或は又、肉體を離れた靈魂や超自然的生存者によつても處有される。宗教とは、かゝる力を己がものとなし、それを己が福利の爲めに用ゆる事に外ならぬ。此の目的を以て供物や祈禱が行はれた。然しマナは道德的には無記であり、従つて惡しきを工む陰術によつても亦、用ゐられるのである。

此のマナなる觀念を以つて pre-animistic hypo-

thesis を唱へる人々が、Taylor の Animism をば宗教の最原始的現象ではなくて、原始人の心理作用が稍進化した階段に於て産り出されたものであると云ふのは正しい。然し、此のあらゆる效力を有する祕密的力としてのマナの如き非人格的勢力なる一般的、抽象的觀念は、原始人には不可能である。力に關する原始人の觀念が如何に不明白であり、又、原始人が其の力に附する人格性が如何に不明であらうとも、彼がその力を知る際の仲介となる經驗は、常に特定なる時と處とに於ける特定なる行爲であつて、特定なる性質を持つものである。換言すれば、彼の經驗は、すべて具體的、瞬間的、個物的であつて、既に述べた人格化的統覺の上に基くのである。原始人の理解とは、人間の意向を對象に投射する事である。然し此の過程では、その對象が生けるものなりや否や、換言すれば靈魂を有するや否やを未だ問はないのであ

る。更に又、モアに從へば、此のマナの觀念を有すると報せられた人間は、文明の最低階段に在るのでなくして、むしろ發達した animism の階段に在るのである。

次に、我々は再びもとに歸り、前述の漠然たる力に對して爲す人間の行爲は如何と問はねばならぬ。かゝる力の襲撃に對する人間の行爲は、彼が可視的敵のそれに對すると全く同じである。人間が襲撃されたと云ふ事實は殆ど生理的に闘争本能を活動せしめる——逃走本能がおきない時には尙更の事である。かくて、例へば將に迫らむとする嵐は、實際上、武器やあらゆる戦争の動作及び喧囂を以つて向へられるのである。支那では日蝕を追ひ退けるに同様な手段が用ゐられた。今、模倣的魔術 (mimetic magic) と呼ばれる多くの行爲は人間が實際に己が力で自然現象を操り動かし、或は自然の方の起る糸口を創造すると信じて居た此

の原始時代の遺物である。而して、若し斯の如く無意識的に爲された行爲が効果を示せば、その後、それと同様な場合に接した時、その行爲は一層意識的に、而して益々強い信頼を以つて繰返へされる。その手段と方法とは子々孫々に傳へられるのである。

以上の記述に於て我々の最も注意すべき事柄は人間の取扱ふ力は、人間より遠くかけ離れてゐないこと云ふ事である。人間が、かゝる力を感知し、或は其の力と關係するのは、唯だ其の力が人間にはたらきかける時に於てのみである。而して此の力が人間に直接に働きかけ來る如く又、人間が其の力に働きかけ得るのである。かゝる力は超自然的ではなかつた。自然現象が因果の法則によつて生起すると云ふ觀念を持たない人間は、我々の云ふ意味での自然なる概念を持つて居ない。従つて又、超自然なる概念をも持つて居ない。原始人は

唯だ日常の出來事と神祕を暗示する異常な出來事とを區別するのみである。兎に角、原始人の知れる唯一の自然の活動は、以上述べた如き力のみである。而して又、此の力の仕業は不可知的でもなく又、不可抗的でもない。此の力が人間を襲撃する場合には、彼はそれと戦ひ、而も屢々彼は其の力に對して引をとらない事を立證した。要之、總ての人間が、或は少くともある人間が、かゝる力を操り得、而して其の力をば善惡の兩目的に使用し得ると云ふ事は、原始人一般の信仰であり、魔術と宗教とに共通の要想 (postulate) である。

以上の如く、宗教の起原として假設的に分析した原始的宗教經驗と、我々が觀察し得る總ての宗教現象とを併せてモーアは次ぎの如き宗教に共通の特色を見出し、之を彼の宗教史の立場よりその宗教の定義とするのである。

一、人間は、ある方の存在を信じ、その力が人

間に對して爲す行爲如何によつて、彼の安寧幸福が定まると考へる。

二、人間はかゝる力が人間自身と同じ動機によつて活動を始めると信ずる故に、かゝる力は人間にとつて全然不可解のものではない。

三、人間は何等かの仕方にかゝる力を左右して已に危害を加へしめず、又、己が福利を齎らしめうると信ずる。

四、最後に人間は以上の如き信仰のもとに行爲するのである。

行爲なくしては宗教はあり得ない。力の存在に就ての信仰のみにては宗教は成立しない。宗教は哲學や科學の如くに世界と其の現象をば理解し又説明しようとする純理論的努力とは異つて、人間の實踐的興味に支配されてゐるのである。人間が何事かを行爲として表現し得ない處には、宗教はあり得ない。假令、その行爲が發達した東洋の諸

宗教のあるものに於けるが如くに、専心に無の境に入らうと云ふ事であらうとも、それが、やはり行爲である事は云ふ迄もない。兎に角、宗教に於ては、力の存在の信仰は行爲を伴はねばならぬ。

此の宗教的行爲と宗教的觀念との如何は、二つの因素によつて決定されるのである。其の一は、人間が力に對して何を希求するかと云ふ事、其の二は、人間が力を如何に觀念するかと云ふ事である。而して人間の抱く力の觀念は、宗教に於ては殆ど全く彼が力に對して何を要求するかによつて決定されるのである。人間が物質上の幸福に富みそを享樂する能力に何の缺くる處なき間は、神々は此世の幸福、又は此世の永續を施與するものとして考へられ彼の宗教的行爲とは物質的幸福を求める手段を云ふ。而して彼の要求が増加するにつれて神々も亦その姿を廓大するのである。

然し價値の過激なる轉換によつて、人間が以上

の物質的幸福は超越的精神的自我の價値の前には糞土に等しいと考へるに到る時、彼は宗教に於ても、かゝる精神的自我の持つ總ての力、總ての可能性を實現させむ事を求め、一の形而上學的な超越的實在を觀念し、それと融一し或はそれに没入する事を以つて有限な自我の目的、その完成、その永劫の淨福となすのである。かゝる絶對的實在は人間の希求を達する爲め的手段でなく、その目的そのものである。以上述べた兩極端の間に於て、人間の要求と、人間の抱く神の觀念とは相互關係を營むのである。然し宗教に於ては人間の側面が先行すると云ふ事を注意せねばならない。